

九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2021



所 属： 人文学部 人文学科 こども専攻

名 前： 岡村 健太

作成日：2021年5月25日

九州ルーテル学院大学 ティーチング・ポートフォリオ

教員氏名：岡村 健太

所属：人文学部 人文学科 こども専攻

1. はじめに

筆者は2021年4月に九州ルーテル学院大学人文学部に着任し、人文学科こども専攻児童教育コース講師として勤めている。専門は教育哲学、特にG.H.ミードの社会的自我論の考え方を教育学へ援用する研究を行っている。

2. 教育の責任

2021年度は年間16科目（主担当でない科目を含む）の授業を担当予定であり、加えて教員採用試験対策講座も担当している。

2.1. 授業科目の担当

2021年度は以下の表の科目を担当している、又は担当予定である。

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
教育原論【幼小】	2021年度前期	63名	教職科目
教育原論【中高】	2021年度前期	25名	教職科目
道德教育の理論と実践【小】	2021年度前期	50名	教職科目
道德教育の理論と実践【中】	2021年度前期	24名	教職科目
公民科教育実習Ⅰ	2021年度前期	1名	教職科目
公民科教育実習Ⅱ	2021年度前期	1名	教職科目
フレッシュマンゼミ	2021年度前期	26名	共通教育科目
哲学	2021年度後期		共通教育科目
特別研究	2021年度後期		専門教育科目
カリキュラム論【幼小】	2021年度後期		教職科目
カリキュラム論【中高】	2021年度後期		教職科目
公民科教育実習Ⅰ	2021年度後期		教職科目
小学校教育実習Ⅱ	2021年度後期		教職科目
教師力演習	2021年度後期		教職科目
卒業研究	2021年度通年	3名	専門教育科目
小学校教育実習Ⅰ	2021年度通年	50名	教職科目

■ 主要担当科目

教育原論【幼小】

本授業では教育に関する基礎的な学びとして、教育の基本的概念とは何か、教育はどのような歴史を経たか、また歴史の中でどのような思想が生まれたか、以上の3点を中心に扱う。特に、子ども・教師・家庭・学校・社会といった、教育を構成している諸要素の関係性・変遷・課題について学んでいく。それらの学びを通して、教育は何を目指すのか、どのような教育が「よい」といえるのかという、教育に関する理念について考える。

道徳教育の理論と実践【小】

本授業では道徳教育に関して、どのような歴史をもつか、現在が抱える課題は何か、どのような諸理論が生かされているか、どのように学習指導要領で扱われているか、以上の4点を中心に学ぶ。その上で、指導計画や学習指導案について学び、模擬授業実践と振り返りによる授業改善の実践を行う。

哲学

哲学とは何かという問いに対して、私たちはどのように答えるだろうか。本授業ではその問いに答え続ける為に、必要な知識を学ぶと共に、実際に哲学的思考を用いる実践を多く行う。哲学の実践場面においては、対面によるディスカッションとICT活用によるディスカッションを必要に応じて用いる。

学部での教育以外の教育実践は以下のようなものがある。

■ 非常勤講師

2021年5月現在においては実施なし

2.2. 教育組織運営

大学内において、研究推進委員会、地域連携推進委員会の委員を務めている。

3. 教育の理念

近年我々は、インターネットの普及に伴い、ともすれば一問一答型の「知っているか否か」の思考に陥り易い社会の中で暮らしている。反射的な思考を繰り返すだけでは、今後ますますAI等に人間の役割が移行していくことになるだろう。述べるまでもなく、単純な処理等においてはAI等の方が人間よりも優れている側面が多い。これからの社会を担う人材を育成する上で、私は教育哲学の観点から、「他者と協働的に事象を吟味することを通じて学び続ける意義を伝える」ことを目指し、教育を行う。上記理念の詳細については、語順等を入れ替えながら、下記に示す。

3.1. 理念1 問いを立てる機会を設ける

事象を吟味する為には、事象を鵜呑みにせず、積極的に深く思考する態度を育てていかなければならない。その為にまず、問いを立てることを学生に意識させる為、その機会を積極的に設けていきたい。

3.2. 理念2 他者と協働しながら思考する環境を設ける

立てた問いに答えを出す際、自身が既にもっている情報のみで答えを出すと、どうしても浅薄な答えに終始し易くなる。学生が他者との協働的な相互作用の中で、建設的に思考し、より深い認識に基づく答えを作り出していく為の環境を設定していきたい。

3.3. 理念3 学び続ける意義を伝える

折角作り上げられた答えも、それを絶対解として固定化してしまうと、思考はそこで途切れてしまう。しかし、答えはあくまでも一時的な結論に過ぎない。他者との更なる相互作用の中で、互いの結論は更新され続けていく。学びのサイクルの構築を通じて、授業内で理解を終えず、絶えず学び続けていくことの意義を伝えていきたい。

尚、上記の3つの理念はいずれも、「他者と協働的に事象を吟味することを通じて学び続ける意義を伝える」に繋がるが、当然のことながら、私の教育理念全体を3つに分割したものではないし、この3つが教育理念全体を完全に包括したりはしない。

4. 教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法を取っている。

4.1. 学生の価値観を揺さぶる視点の提供

「理念1」に関して、授業内において、学生が「当たり前」だと考えがちな事象に対して、別の側面が見え易くなる視点に基づく話題提供を積極的に行っている。学生の固定観念を揺らがせることで、事象の吟味の必要性に気づかせることと共に、問いの立て方の例示をも兼ねられることを期待して実施している。その際、学生の驚きによる心的負担を軽減する為に、初回授業での説明に加え、直前にも可能な範囲で予告をする等の方法をとっている。

4.2. 他者の思考に触れる機会の提供

「理念2」に関して、授業内において、学生が他者の意見を参考にしながら自身の意見を作り上げられる様な、相互作用関係の場面づくりを行っている。具体的には、slido や Google スライド等のインターネットサイトやアプリケーションを利用して、他者の意見を可視化できる環境を用いている。

4.3. 理解を深め続ける為の授業サイクルの導入

「理念3」に関して、授業内において、学生が学んだ内容は絶えず「その時点における理解」であり、情報が加わることで理解が深まり、時に解釈自体が更新されることを実感できる様に授業デザインを行っている。具体的には、あるテーマに対して「ICT 機器を利用した情報収集」を通じて簡潔な理解をさせた上で、続いて「授業内の解説や議論」を通じてその理解を深めさせる。授業後には「学生からのコメントへの返信」を行うことで、個に応じた更なる理解を促す。そして次回授業の前半では「一部コメントの全体共有」と「授業の補足」を行い、更に理解を深めることを促す。以上を1セットとして授業を行うことを基本としている。

5. 教育改善のための努力

「3. 教育の理念」及び「4. 教育の方法」で述べた内容を実践していく為には、何よりもまず、授業者自身が絶えざる再構成の中で授業を構想しなければならない。自身の授業や学生のコメントを吟味する中で、絶えずより良い授業の在り方について考察し続けていかなければならない。

5.1. 改善努力1 授業評価アンケートと授業改善報告書

5.2. 改善努力2

6. 教育の成果・評価

7. 今後の教育に関する課題と目標

8. 参考資料

- (1) 担当科目シラバス
- (2) 授業評価アンケート結果